

平成29年度第2回高砂市総合教育会議 会議録（公表用）

平成30年1月25日（木）高砂市総合教育会議を高砂市役所南庁舎5階大会議室において開会

出席委員

市長	登	幸人
教育長	衣笠	好一
委員	山名	克典
委員	吉田	美香
委員	神尾	信作
委員	布施	隆志

出席事務局職員

企画総務部長	江谷	恭一
企画総務部総務室長	永井	幹雄
企画総務部総務室総務課長	樽家	正治

こども未来部長	福原	裕子
こども未来部子育て支援室長	木村	敏郎
こども未来部子育て支援室子育て支援課	福本	典子

教育部長	大西	誠
教育部教育推進室長	永安	正彦
教育部教育推進室教育総務課長	都筑	広明
教育部学校教育室長	瀧野	祐一
教育部学校教育室学校教育課長	赤松	祐人
教育部学校教育室学校教育課指導係長	横山	善彦
教育部学校教育室学校教育課指導係	藤原	秀樹

傍聴者

4名

本日の議事

- (1) 学力向上について
- (2) 学童保育について

○事務局

それでは、定刻になりましたので、これより平成29年度第2回高砂市総合教育会議を開会いたします。

まず最初に、市長からご挨拶をお願いいたします。

○登 幸人市長

皆さん、こんにちは。今日は平成29年度第2回目の高砂市総合教育会議でございます。お忙しいところ、ご参集いただきまして誠にありがとうございます。

年が明けまして、もう1カ月になろうとしておりますけれども、昨年中は大変皆様方にはお世話になりました。また本年もどうぞよろしくお願いを申し上げます。

本日の総合教育会議でございますけれども、学力向上と学童保育についてということで、2題挙げさせていただきました。

学力向上については、これもずっと総合教育会議ができた折から、学力向上についてということで色々意見交換してきたわけでございます。ところが、今回、1月に入ってからだったと思っておりますけれども、神戸新聞に小中ともに全国平均を下回るということの記事が大きく出ました。大変我々としては憂慮すべきことでもありますし、高砂市にとって、あまりああいう記事は好ましくないと思っておりますし、記事のその根拠となっておりますデータ自体もやはり成績としては好ましくなかったということも言えるのではないかと思います。

そういうことの中で、今までの取り組みと、そしてまた、今後それを受けてどうされようかとされているのか。また、今の昨年度のその結果についてどう認識されておられるのかも含めて伺いをさせていただけたらなというふうに思います。

一方で学童保育でございますけれども、学童保育につきましては、今後、もっと希望者が増えてくるのではないかとというふうに思っております。そういう中であって、今、高砂市の学童保育所については、民間にやっただいておりますけれども、補助という形で実施をしておりますけれども、これ以上増えると、施設の一杯一杯になってくると、そのカバーできないのではないかと、受け入れもできなくなる状況も想定されます。保育所については、待機児童という名称で呼びますけれども、学童保育については、待機学童というような名称で、また、その新たな課題、問題になるというふうにも認識しております。

また、保育所についても一緒でございます。今後、国の政策もそうですけれども、女性活躍という中で、その子どもさんの受け皿といいますか、その保育について、やはりその施設の充実整備が今後求められていくであろうということも予測されます。それとともに、そのまま小学校へ上がっていきますので、学童保育についても増えていくというふうに思っております。

そういった中で、今、教育委員会の所管ということではないですけれども、同じ学校の小学生という対象者について、やはり一定の教育委員会としても認識を持っていただく必要があるのではないかとというふうにも考えておまして、そういった点につきまして、学童保育についてお話をさせていただけたらというふうに思っておりますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

以上でございます。

○事務局

ありがとうございました。

本日は、全ての構成員の皆様にご出席いただいております。

出席者のご紹介につきましては、出席者名簿をもってかえさせていただきます。

それでは、これから議題に入らせていただきます。

高砂市総合教育会議運営要領第4条の規定により、市長が議事進行を行うこととなっておりますので、これからの進行は市長にお願いいたします。よろしくお願いいたします。

○登 幸人市長

それでは、お手元の次第にのっとりまして議事を進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

1点目は、学力向上、2点目は、学童保育ということでございます。

まず、学力向上につきまして、少し教育委員会の現状、あるいは認識等々、そして、これからどう取り組んでいくのかについて、まず説明をお願いしたいというふうに思いますので、よろしくお願いいたします。

○大西教育部長

資料の1ページをお願いいたします。

本日のテーマでございます学力の中で、平成29年度すべての子ども一人一人に確かな学力をという形で、このたび、昨年4月に実施されました小学校6年生、中学校3年生を対象といたしました全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた中で、教育委員会として、今後の指導に関しての取りまとめをさせていただいたところでございます。その結果を参考にいたしまして、小学校、中学校9年間を見据えました授業方法の工夫・改善に取り組んでまいり所存でございます。

それでは、資料の説明をさせていただきます。

この平成29年度の全国学力状況調査の結果を踏まえた中で、教育委員会といたしまして、全教科においての指導のポイントという形で大きく4点をまとめさせていただいております。

この4点に関しましては、書かれていますように、学習の目当てを明確にし、学習したことをまとめさせたり、振り返らせたりします。ペアや小グループによる話し合いを取り入れます。また、児童の自分の考え方を書かせる機会を増やしてまいります。また、児童・生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導を工夫しますという形で、平成29年度の結果を踏まえて、こういう指導のポイントという形で、4点、明確にさせていただいております。

それで、下段のほうにございますけれども、全国学力状況調査の中での教科に関する調査の内容を分析し、こちらのほうとして取り組んでいくポイントとして取りまとめてございます。

まず、国語、算数・数学という形でまとめさせていただきました。

冒頭、市長が申しましたような形で、全国の平均正答率に比べまして、当市の平均正答率は括弧で書かせてはいただいておりますけれども、下回っておるという結果でございます。国語の小学校に関しましては、叙述をもとに自分の考えをまとめてまいり。また、目的、意図に応じて、分類したり関連づけたりを今後、指導してまいりたいというふうに考えてございます。

また、中学校の国語に関しましては、文書の構成や論理の展開、表現の仕方について評価する、集めました情報の客観性や信頼性を確認してまいりたいというところで、叙述に即した読み、情報を整理しながら書く力を国語に関しては伸ばしてまいりたいというふうに考えてございます。

そして、数学・算数の考え方といたしまして、小学校の算数にいたしましては、資料の情報を読み取る、筋道を立てて課題を解決するというところをポイントにしてまいりたいと。

また、中学校の数学に関しましては、用語の意味を理解し活用し、事象を解釈し、理由を筋道立てて説明するというポイントで、数学、算数に関しては、情報を整理・活用するとともに、筋道を立てて考える力を今後伸ばしてまいりたいというふうに考えてございます。

また、次のページをお願いいたします。

2ページになりますけれども、同時に行いました児童・生徒の質問用紙の調査からわかりました学校での生活、また、家庭におきましての生活に関する調査結果を高砂市と全国の中で取りまとめさせていただいたところでございます。

まず、学校での生活に関します調査結果のところ、全国に比べて若干数字が大きく違うところ、上から3つ目のところがございます。学校で今までに受けた授業では、授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますかという質問に関しまして、小学校6年生に関しましては、思っていたというのが、高砂市は73%、全国は76%。しかし、中学校3年生にまいりますと、そういうふうに、授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思うのは、高砂市は49%、全国は66%と大きな乖離がございます。

その中で、学校での生活に関する調査結果を踏まえた中で、今後、学校では考えたことを話し合い、学習内容をまとめ振り返る授業づくりを目指してまいりたいというふうに考えてございます。

それで、右のほうにございますけれども、家庭での生活に関する調査結果でございます。

その中で、一番上でございます。普段の日に、テレビ・ビデオ・DVDをどれぐらい見ていますかという中で、どれぐらい見ているかという基準といたしましては、2時間以上見ている児童生徒の数でございますけれども、小学校6年生におきましては、高砂市は、そういうテレビ・ビデオを2時間以上見ているのは60%、全国は56%でございます。しかし、中学校3年生にまいりますと、高砂市は62%の生徒が2時間以上、テレビ・ビデオ・DVDを見ている。全国平均といたしましては、49%という中で、当市において、そういうテレビ・ビデオを見ている生徒が多いというところでございます。

上から2つ目の欄でございますけれども、家庭において、学校の授業の復習をしていますかという質問に関しまして、小学校6年生におきましては、高砂市は47%、授業の復習をしておりますというふうな回答で、全国は54%。中学校3年生になりますと、また、高砂市におきましては、37%の生徒が家庭で学校の授業の復習をしている。しかしながら、全国になりますと、52%の生徒が学校での授業の復習をしているという結果になってございます。

この結果を踏まえまして、今後、家庭では、テレビ・DVD・インターネットの時間を短くし、それにかわりまして、読書や家庭学習の時間を増やしていくという中で、この児童・生徒質問用紙のここの検討をさせてもらった中で、学校、そして、家庭がお互い協力しもって、計画を立てて、予習や復習する学習習慣の定着を目指してまいりたいというふうに考えておるところでございます。

以上が資料の内容でございます。

もう一つ、それについて、3ページでございます。

3ページに関しましては、その平成29年度の高砂市におきます中学校の部活動の状況調査の結果をお示しいたしてございます。これは、新学習指導要領におきまして、部活動の意見といたしましては、学習意欲の向上、また、責任感、連帯感の涵養等に資するものでございまして、この部活動に関しましても、学校教育の一環として、教育課程での関連が図られるものでございますので、このたび、29年度の部活動の状況の一覧をお示しさせていただきました。

その中で、見方でございますけれども、高砂市全体といたしまして、6中学校におきまして、部活動、また運動部という形で、Ⅰ期、Ⅱ期という形で、Ⅰ期は4月から7月までの4箇月、Ⅱ期に関しましては、8月から11月までの4箇月という形で市内の部活動の数をお示しいたしてございます。Ⅱ期に関しましては、8月から11月には、運動が58、文化部が22、市内におきまして、部活動80あるというところでございます。

完全実施率でございます。完全実施部数に関しまして、これもⅠ期、Ⅱ期という形で、4月から7月、8月から11月という形で、完全実施率に関しまして、「ノー部活デー」を設置してございます。ノー部活デーというのは、平日最低週1日以上は実施し、土曜日、日曜日等の休日におきましては、最低月2日以上、ノー部活デーを実施するというところで、もしも実施できなかった場合は、平日の代替日を設定するという形で、そういうノー部活デーの設定をしており、それができたかどうかという形の結果でございます。

これに関しまして、そこに書いております完全実施率でございますけれども、4月から7月のⅠ期に関しましては、運動部全体の18.3%がノー部活デーが実施できたという形で、4箇月連続で実施できたという形でございます。

運動部に関しましては、8月から11月になりますと、51.7%の運動部が4箇月連続でノー部活デーが実施できたということでございます。

文化部に関しましては、完全実施率といたしましては、Ⅰ期、Ⅱ期とも86.4%、ほとんどの文化部に関しましては、ノー部活デーが実施できておるというところで、運動部、文化部全体といたしましては、Ⅰ期が完全実施率は36.6%、Ⅱ期に関しましては、59.8%ということになってございます。

下段のほうでございますけれども、上段のほうは、4箇月連続のできたかどうかという形で、下段のほうは、月ごとにノー部活デーが実施できたかどうかという表でございます。

Ⅰ期、4月に関しましては40%、5月、65%という形で月ごとに書かさせていただいてございます。最後、11月においては、70.7%のクラブがノー部活デーを実施できておるというところでございます。

以上でございます。

○登 幸人市長

まず、この中で進めたい点が、正答率といいますか、成績の部分と、それと生活の生徒への質問調査の結果ということでございます。

まず、正答率につきまして、お話をさせていただきたいというふうに思います。また、認識をお尋ねしたいというふうに思います。

この1ページにありますように、国語で小中があります。国語は全国と同程度でした。中学校は全国より下回っていました。算数・数学のほうで、小学校は同程度でした。中学校も同程度でしたという表現があります。ただ、実際には、新聞紙上どうこうありますように、全部下回っておったということです。2ポイントあるいは3ポイントという数字ですが、現実のその下回っているポイントにかかわらず同程度というのは、それはやはり同程度の基準の幅が何か表現の仕方であるわけですか。そうかも認識自体がその程度であれば、もう同程度だと、変わらないという認識なのでしょうか。

○衣笠教育長

この同程度という表現で書いているのは、文科省のほうプラス上5ポイント、下5ポイントまでなら同程度という表現であらわすというふうに、手引きにそういうふうなことが書いてあったので、それに準じて示しているのですが、受け止め方としては、確

かに市長がおっしゃったように、神戸新聞でも書かれていましたように、ポイントだけ見ると、やはり全てほとんどの部分について下回っているということなので、下回っているという表現をして、保護者の方にもこういうリーフレットを配るかどうか、少し部内でもいろいろ検討したのですが、ただ、そのことによって、そこだけ注目されてしまうことに少し危惧したのと、それと、何か高砂の子って全部下回っておったというイメージが、このときに限って、29年度に限って悪いイメージを持ってしまうということにも少し気になりましたので、文科省の基準にあわせて同程度という表現を使わせてもらったということです。ただ、指導する側にとっては、教育委員会も含めて、学校現場も含めて、同程度という認識ではなくて、しっかりと数字を見ましたら、下回っていることをしっかり受け止めて、今後の対策等は考えていくということは、園長・校長会とか、部内の中でも共通認識はさせてもらったということです。

○登 幸人市長

ということは、この神戸新聞、全国を下回るとありますが、平均下回る、この下回る、数値的には下回っていますが、それは文科省という同程度の範囲には入っておる、それはこういう新聞社には言わないのですか、言っているんですか。

○衣笠教育長

言いますが、そこは数字だけ見て、やはりばんと比べて、独自のあの表についても、私どもは、全国と比べた表だけですが、県の平均なんかも公になっていますので、三つを比べて出したほうが、新聞としては、目を引くといいますか、そういう意味で、多分ああいう少しセンセーショナルな書き方をされたというのが神戸新聞の考え方だと思います。取材を受けたときは、その旨、伝えて、指導をしていくための手だてとして、こういうことを考えていますということを強調したのですが、やはり新聞社にとっては、それよりもやはりばんと比べてということだったのかなと思って、少し悔しい思いもしましたが、それは事実ですので、しっかり受け止める必要があるというふうに切りかえて考えていかなければならないというふうには反省したところです。

○登 幸人市長

ということは、ここ全国平均あるいは県平均よりも下回っているという認識は重く受け止めると。ここの新聞の中でも、コメントで、平均との開きを真摯に受け止めると書いていますが、どういう言い方をされたかは知りませんが、新聞のうえではそう書いてあります。教育委員会のコメントとして。この開きを真摯に受け止めるとするのは、またこれ少し意味が抽象的ですが、どういうふうな受け止め方をしたのか。

○衣笠教育長

実は、平成17年に高砂市のほうで予算をいただいて、その高砂市独自で小学校2年生から中学校3年生までの悉皆調査を全員の調査をさせていただいたときの課題が四つほどありまして、1つ目は、小学校から中学校へ行く時点で、理解度が低下したり、または学習の意欲が低下したりするようなことがありましたので、そこで、小中連携をやっていこうというふうな話とか、小学校で一部教科担任制を導入してやっていこうという施策を通じて、ほぼそれは解消しているような感じのデータは出ております。

ただ、2つ目の課題の家庭でほとんど学習しない子がその当時、5%から13%おりましたので、それはやはり家庭と連携しながら、家庭学習の促進「グーチョキバー」という啓発のリーフレットをつくらせていただいて、家庭で学習、こんなふうにして下さいということを啓発していくようなものをつくらせていただいたのですが、学習しな

い子というのは、当時は5%から13%、具体的に言ったら、小学校6年生は7.5%、中学校は12%いたのですが、それが今回の調査では、小学校は3%、中学校は6%に大分改善はしていますが、やはりそれだけの人数、家庭で全く学習しない子がいるというのは、これは大きな問題なので、ここはしっかりと受け止めて、さらに家庭と連携した形で、家庭教育、家庭での学習習慣を身につけるような啓発をしていく。

その中で、家庭での生活を見たら、2ページにありますような、テレビとかDVDを見ている時間を結構長くて、ここでの正答率の全国と比べる以上にポイントがもうかなり全国と比べてあいているという課題がありましたので、ここには少し示していませんけど、スマホとかテレビゲームをしている子も結構、高砂市では、国が37%だった、中学校、高砂市は49%というか、十何%ぐらい上回っているというか、4時間以上している子もかなりの率で、中学校は18%もいるということで、これは大きな課題なので、ここはしっかりとやはり家庭での生活、きっちりとこのテレビとかビデオを見ている、またはゲームをしている時間を少しでも学習に向けてくれたら、また少し違ってくるということは課題として見えてきましたので、これは平成17年度に悉皆調査で出てきた課題とは違って新たな課題として受け止めて、これについてもやはりしっかり取り組んでいくというふうなことが考えられるという、少しここにも啓発的なことを載せていただいて、学校のほうでも、学校からそれぞれの実態に応じた保護者の方へのお働きかけをしてほしいということで、今、動いているところです。

○登 幸人市長

これまで、全国平均、全部下回っていたというのはあんまりなかった。少し上へ上がったたり下がったり、平均を少し動いたと言ったら怒られますが、前後してやっていたと思いますが、今回は全部下回ったと。これは。

○衣笠教育長

正答率につきましては、これまでは小学校はどっちかという上回っていて、中学校は少し低かったり下回っている。中学校は下回っているのが多かったのですが、上回っているものもあったのですが、今回、この29年度については、少し言葉は悪いですが、全滅といいますか、こんなことは初めてという形で、そのときに新聞に載ったのですが、悔しいといいますか、でも、それは事実ですから、そんなことを言っておられませんので。今までは、小学校はどちらかという上回っている。この国の基準でいえば、同程度ということで、5ポイント以上上回っていることはなかったのですが、2ポイントであったり、3ポイントは上回っている状況が多かったのです。

○登 幸人市長

それは、大体今まで認識してお伺いしましたが、今までも学力向上させていこうということでそれぞれ取り組んできた。今も先程ちらっと申されました。その辺がこの度こうなってしまったと、取り組んでいるのにもかかわらずこうなってしまった。先程数字でも、家庭の中での数字も言われましたが、そういうふうに数字的には改善とっていいのかどうかあれですが、そういう数字になってきた。だけど、結果こうなった。これは何が原因だというふうに思われますか。

○衣笠教育長

個人的な意見になってしまうのですが、これが原因だというのは、明確には私自身は言えないのですが、これと違うかなというのは、やはりこの学習状況調査の学習の内容が、少し思考力とか、判断力とか、表現力を重視したような形で出されているのが一つ

の原因かなど。大学の入試も改革されて、今、変わってきていますし、それに向けて、こういった調査の中でも、こういった学力をつけてほしいという思いがあつての学習のテストということもあるのかなど、一つそれはあると思いますのと、やはりこれが言われている中で、高砂市の先生方が危機感を持って、これはただの調査だけでも、学力の一つの領域であるけれども、ほかの教科ありませんから。でも、国が50億近くかけてやっている調査やから、これを活かしてしっかりと取り組んでいこうという教師の士気も何かこう落ちているのではないかなどというのは、少し個人的には思うので、そこはやはりしっかりと受け止めて、これは学力の一分野だけでも、それも大事な部分だから、しっかりと取り組んで、これを分析して指導に活かしていくという意識を持っていただきたいというのが一つある。それが授業の中で少しあらわれているのかなど、授業のあり方について、話し合いの活動を入れたり、自分の考えを相手に伝えたりする活動もやはり全国と比べたら、高砂市は、特に中学校はそういった活動があまり取り入れられていないというのか、出てきていますので、そこらあたりが少し結果として出てきているのかな。ただ、今回の結果がそれだというふうな、言い切るのは少し難しく、そこまでの分析はまだできていない。因果関係はよくわかりませんが、相関関係はあるのかなどというようなことは感じます。

○登 幸人市長

以前から申し上げておつたのは、学力向上、全体がレベルアップしていくのならいいのですが、全体的にレベルアップしていくときに、どのようなやり方でどうしていくんだというのは非常に、全ての子どもを対象にするわけですから、難しいかも分からない。ただ、せめて取り組む、どうなのか、方法として、習熟度という、学習の遅れている子ども、試験をしてもやはりこの点数が低い。ということは、その遅れている部分を何とか補習をしたりとか、各学校で、そういう子はわかりますから、そういう子を対象にした補習学習みたいなものはどうですかねということでも申し上げていたのですが、今回のこの結果というのは、私はやはり重く受け止めるべきかなというふうに思っていますけれども、これ今回初めての結果ではないので、ずっときた結果、こうなっていますので。ということは、教育委員会としてどうなのか、また学校としてどうなのだろうと。先程から家庭の話もされていますが、家庭としてどうなのかというのはやはりそれぞれの部分で捉えるべきだろうなど。

そういう中であつて、学校として捉えたときに、先程言いましたように、遅れている子どもをいかに少しでも底上げするかということも、私はこの正答率どうこうという、その平均点を上げるにも大事かなど。平均点を上げるということだけでなしに、遅れている子を上げることによって、勉強に対してまた目を向けてもらえる、全体的なそれでレベルアップが図れていくのではないかなどというふうに思います。今回の結果がそれがあらわれてないのか、あるいは上の成績のよかった子が落ちたのか、そのようなことは分析というか、そういうのはできないのですか。

○衣笠教育長

いや、それも度数分布というか、それが出ていますので、見ましたら、やはり学校によって、格差があります。市全体で見ると、こういう山で理解度がきれいな山の形なのですが、学校ごとに見ると、やはり山が二つ、二極化しているといいますか、本当に分からないで、放ったらかしにはしてないでしょうが、理解もできないままに次のところの授業にいつてしまうという子がいるのではないかというような感じの山が二つできているような学校もありますので、そこをやはりしっかりと、今、市長がおっしゃったように、補充授業であるとか、またはそういう子もきちっとこういう話し合い活動の中で、

自分の意見を言う中で、興味を持って学習できるような授業の手だてとか、そういうようなものが大事かなと。

それから、よく教育委員会で山名先生がおっしゃるのですが、部活動のあり方についても、もうくたくたになって帰って、宿題をしないで寝てしまうという現状も、今日も厳しく山名先生からご指摘いただいたのですが、その部活動についても、見ると、平均3時間以上やりますというのが、国は大体12%ですが、全部のほとんどの学校がレベル高くて、多い学校では、倍というか、24%ぐらいの3時間以上やっているようなものもありますので、そこもやはり今後は教師の働き方改革と絡めながら、部活のあり方についても少し検討していくべきかなというのも一つの課題にはなっています。

○登 幸人市長

現状は現状として、これはもう受け止めざるを得ない。そうしたら、それを受けて、ここの1ページに、全教科における指導のポイントとあります。ポイントとしてこれだけ挙げられていますが、これを例えば具体的に、教育委員会とすれば、各学校のそれぞれの結果が見えていると思いますから、この学校にはこういうような指導をもう少し深めていこう、高めていこうとか、この学校にはと、それぞれのやり方があるかと思えますけど。教育委員会は、学校に、例えば具体的にどういうふうなことを求めておられるのか、あるいは指示というのか、そういうことをされているのか。また、学校は、それを受けて、現実に何をどうされているのか、どういう取り組みをされているのかと。家庭も、先程言われましたけど、家庭にパンフレットを配ってとか言われましたけれども、家庭はそれを受けて、学校からやはり何らかの指導というのか、依頼というのか、お願いというのか、そういったこともされていると思うのですが。ただ、家庭の中で実際どうされているのかと、やはりそれぞれ具体的にどの方向へ進もうとして、今、何をしているのだというのがわかれば教えていただきたいと思うのですが。

○衣笠教育長

今回、この調査の前に、全部の16校の校長先生を教育委員会に来ていただいて、私を含めた担当と一緒にヒアリングというか、ずっと時間をかけてやる中で、どの学校も学びんぐVプランという計画を出しているのだから、それを見ながら、やりとりをする中で、本当に熱心に取り組んでいただいて、例えば宿題なんかも出しっ放しではなくて、きちんとその評価をして返すということがまだできてないですとか。また、朝のドリルをやるときに、ドリルの時間が決まっているのだけでも、先生が遅れて行って、その時間が10分なのに5分になってしまっているとかいう課題が、結構、先生方も受け止めて、今、これに取り組んでいる、具体的な話が出ていますので、それをやはり時々教育委員会がチェックするという言い方はおかしいですが、やはり学校にもっともっと働きかけていくことがないと、どうしても自分の学校だけの数字、比べて私たちはわかって、ここはこうだとか比べて比較しながら、やれよとか、頑張れよという激励はするのですが、やはり学校は学校だけの内容しかわかりませんので、そこらあたりをもっと学力向上会議というものもありますから、学びんぐVプラン会議というのがあるから、その担当が集まってきて話し合いをする機会もありますので、そんな中で、こういうことをやったらこれでいい結果が出たよというようなことを協議したり、課題がこういうふうな課題で困っているのだけど、どうしているのかというようなことを話し合うような場もやはりもっと充実させていかないといけないというのは感じております。

○登 幸人市長

各学校は、自分ところの成績はわかっていますから、県の平均も全国の平均もわかっ

ている。それを受けて、この学校では、あれは何も6年生だけの成績ではないと思いますので、1年からずっときた中での結果として今の数字が出てきていると思います。それを全校で、例えばどのような教育も、今まではこうしてきたけど、この部分はひよっとしたら足りないかなとか、この部分をもっと伸ばしていこうかなとか、そういう学校での議論とか、あるいはそういう議論をさせるための教育委員会からの投げかけとか、そういった具体的なものはあるわけですか。やっておられるのですかね。

○衣笠教育長

そういった具体的な取り組みについての議論とかいうのは、各学校の研究推進の教師がおりますので、その方たちが集まってきて、その会議の中で議論といいますか、情報交換をしながら、自分の学校に活かすというふうな取り組みは、そういう機会は各学校ありますけども。

○登 幸人市長

それは先程言われたように、教育委員会として、私は別にチェックというのか、監視というのか、やはり見守る必要があるのと違うかなと思います。それと、統一的な学力に対してはこの考え方でいこうというのは、やはり教育委員会が伝えないと、なかなか各学校それぞれ考えなさいといったって、なかなか認識も曖昧になってくると思いますので、やはりそれは教育委員会として、方向性というのか、あればはっきりと言うべきと違うかなと思いますけどね。そのやり方、取り組む方法としてもね。学校によっては、補習授業をやっておられるということですから、私はそんなものをもっと各学校全部広げていただいてもいいと違うかなと。

大阪市が、橋下市長のときですが、あのときは、全部さらけ出して、大阪市の子ども、そんなに悪くないと、こんな最下位から脱出すると言われて、今少し上がっている。我々のその高砂市も、新聞に出て、全国平均を下回るという、全部の科目で、全小中学校とは書いてないのか、が全科目で下回る、これはやはり少し子どもに申し訳ないというふうに思います。

○山名教育委員

市長の思うこと、僕らも全く同感で、結局、僕らでいわゆる教育委員としての思うことは、教育長と違って、いわゆる現場の先生の指導というのがなかなかしにくくて、しにくいではなく、できませんので、実際にやっている内容に関しての、もう一つ、教育の現場では、どんな勉強をさせているということは、伝わってくるということはある程度わかるのですが、結局、僕らがする仕事というのは何かといたら、結局、前々から言っているように、先生方にいわゆるインパクトを与えて、方針を出して、教育、学力を上げるにはどうしたらいいんだということ、やはり今回の結果を踏まえたら、やはりこれは明らかに大変なことだということで、意識を持って、危機感を持ってもらわなければならない。そうしたら、危機感を持ってもらうためには、やはり今までどおりの通達、校長会、校長の先生を呼んだって、結局、現場の、実際にはクラス担任の先生は、教育長からの直接的な話、教育長のそれぞれの危機感を持った形の校長等には伝えていることがなかなか伝わりにくい面があるのだらうと思います。そうしたときに、何をするかといたら、僕が思うのは、やはりこの成績にしたって、定期的に毎年のように発表しようと、明石市がしたように、やはり定期的に毎年調べてみて、やはり成績がどうなっているかと如実に発表しますと、そうすることによって、やはりそれなりに先生方も、伸びないのなら、何で伸びないのかと、いわゆるここにお題目でいっぱい挙げて、しようと言っていること、書いているけど、市長が言うように、どれだけやられている

のか。言っている、どれだけやっているのかということが出てくると思います。やはり成績が出なかったら、もっとやはり突っ込んでもらおうと。それで、それなりの教育、勉強する。明らかに学力に集中して、いわゆる大阪の例とか、岩手県とか、いろんなところと同じように、やはり何年かは学力向上に対して徹底してやってもいいのではないかという。いわゆる今回、この何年間はもう明らかにやりましょうと、一致団結してという決意を示したそれなりの教育方針をやはり伝えてもいいのではないかという気はしています。

だから、そのためにはどうするかといったら、先生方のクラブ活動につながっていき、やはりクラブ活動をできるだけ負担を減らして、結局、子どもらもやはりそれなりの余裕のある時間をつくって勉強できる時間をつくってあげないとだめだと。そういうためには、クラブ活動の制限をきちんと徹底してしまおうと。そういう形をやって、家庭内の時間もそうだし、終わった後の時間もやはりクラブでやったとしたら、結局、そのときの補習授業とか、そういうもののやり方というものも出てくるだろうし、そういう子どもに対して時間を余裕を持たさないことには勉強できない。これは先生方も当然、クラブに取られる時間をやはり勉強のほうに向けて、学力向上に対してどうしたらいいのだろうという考える余裕が出てくる、そういう形が出てくる。そういうやはり余裕があって、一つの目標、しばらくは何年間、3年間なら3年間はもう学力向上に向けての徹底しよう、そうしたら何かを犠牲にしよう、犠牲にするというよりも、今の過剰なクラブ活動の分を減らしていこうという姿勢を、前から出してほしいって、全校長、市内はひょっとしたら、クラブ活動、徹底して減らして、参加する大会も減らしてするような形で校長会で話し合っ、一回英断してくれませんかというようなことを言ったのですが、なかなかそれも実現できない。それらも含めて一斉にやるような形の行動を起こさないといけないのと違うかと。

そのため、それとあといろんなこと、いっぱい言いたいことあるのですが、その授業日数を増やすためにどうしたらいいかということになったら、今回でも、結局、2月に入ったら、今日のスケジュールの中にオープンスクールとか、そういうものがありますが、そういうのに関しても、結局、オープンスクールはしたが、その分は代休をとるような形でしたら、結局、子どもの授業日数が減ると。やはり増やすためには、教員をやはり、担任の先生が代休を取れるような形で、一斉に休むことをしないで、今やったら、土曜日、オープンスクールをやったら、月曜日一斉に学校休みます。そうしたら、やはり働き方としては、保護者に関しても迷惑をかけるし、それよりも担任の先生が順番に休んでいくような形で休んでいって、授業は続けていく、学校続けていく、そういうことによって、授業日数の確保もあるし、結局、今から、例えば今回から、来年からでもそういうのをやるということになれば、授業日数を増やしてでもやっていこうという形を考えたら、もうやる気が伝わっていくと思います。それを先生方にも、いわゆる一般市民に関しても、学校側としても、授業日数、少ない分、やはりやっていこうと。それだけの学力向上に対しては、基本としては、やはり授業日数を増やさない限り上がりにくいところがあると、勉強する、これぐらいの今言われた補習授業とか、そういうものをするのも大切だし、クラス内の中での勉強の仕方としても、できる子はできない子に対してのペアとしての教えていく形とか、グループの、そういうものも充実はしますが、やはりまず先生方が子どもに対して接していく時間を長くして、やはり子どもは勉強する時間を長く。そうしたら、やはり先生方の待遇改善をしていかなければならないかなという、それはすぐにはできないが、まず、お金の問題等、その辺をサポートして、校長先生が代休で休んだ人の授業を持つ、それも働き方として、また文句を言われるかもわかりませんが、していく。それと学年主任も見ていく、そういう余裕のある先生をやはり手配して置いていく、加配していくような感じにしていけば、やはり学校の中で先

生方も余裕も出て、そうすれば、勉強の仕方のあり方ももっと今回以上に改革も大々的にする、やりましょうという形を打ち出すんやったら乗ってきやすいし、先生方の意識も改善するのではないかな。今、この状態だったら、もう何かだらだらして、いくら言っても、常にこういうやりましょう、駄目だったら改善してください改善してくださいと言ったって、市全体としていく、今言われた大阪市みたいな完全に一致団結してやりましょうという形の姿勢を示さないと、みんな何か目覚めないのではないかなかという、ほぼ目覚めさせるには、何かインパクトのきついことを一回やってもいいのではないかなという気は、それぞれいろいろ具体策は何をするかはいろいろ考えないといけないと思いますけどね。

そうしないと、一番大事なものは、はっきり言って、ずっと言われるのですが、定期的に出したら、学校の先生方の成績、そこの学校の責任どうのこうと言われたりとか、問題になったのは、高砂市で出さないのは、全国的に高砂市がレベルが低いと言われることと、その中のさらなる差別化がいわゆる中学校間で、どこの中学校とどこの中学校がとか、要するに成績はあそこはできが悪い、地域的にあそこはできが悪いとか、そう形で差別があったら困ると思いますが、具体的には、地域、学校は出さなくても、全体としてのレベルアップしていく、経年的な成績の推移をやはり出して、成果が出たということを見せていかないと、それを言っている、結局、市長と思われるのと一緒で、どうにかしてやっていこうと言っているが、一個も結果出ない、どうなっているのか、所詮はもう一緒かということになってしまうから、一回、どれだけ効果があるかわかりませんが、インパクトのあるクラブ活動を徹底して、守って、週2回は絶対しない、野球の大会があったって出ていかない。そういうことをやって、その間はやはり勉強してしましようと、今日は帰ったら勉強しましよとということをやったり強く押し出して、悔しいから頑張らしましよとということの、いわゆる何らかのそういうアクションを起こしていいのではないかなという気がするのですがね。しないといけないと思います。

○神尾教育委員

幾つかお話ししたいことがあるのですが、まず、危機感ということについては、確かに危機感が、私、中学校が現場でしたが、薄かったなと思いますね。その理由というのは、二つあると思います。

一つは、やはり先程教育長からありましたように、ずっと下がっていたわけではなく、ときには中学校も含めて、同程度もしくは同程度よりもややポイント的には上回っていたこともあったので、そんなに危機感がなかったのかなということが一つと、もう一つは、教科ですね、中学校は教科制なので、国語と数学と時々理科が入るということで、それ以外の教科の担当は、やはりそこまで、当然、学校の中でこういう成績でしたよ、こんなデータですよということは周知するのですが、やはり自分が社会であったり体育であったりすると、いくらか温度差がそこに生じてきて、学校全体としての取り組み、やや陰りがあって、その危機感ということから言えば、少し薄かったのかなと思います。今回は、全てで下がってしまったので、こういった新聞報道もあったわけですから、そういう意味では、危機感をあおって、うまく利用して、悔しいというのを晴らすのにはいい機会かなと思ったりします。

あと、ではどうやって学力向上を図るかということですが、一番いいのは、先程山名委員からもありましたように、人を増やすことですが、これ定数法があるから、市単位では無理だと思いますが、やはりスクールアシスタントだとか介助員、これがいけると思うので、今、特別に合理的な配慮を要する子とか、こういう子どもたちも増えているから、そこで少しお金をかけていただけたらと。子ども1人を見る目を少し増やしていただけたらいいかなと思います。

あと教師の授業力ももちろん必要ですが、今でもやっていますし、いろんなことでこれからは授業力を上げていただかなければいけないのですが、ただ、現実的には、例えば小学校だったら、すぐ英語の授業が始まりますよ、小中学校で道徳が教科化になりますよ、新学習指導要領が始まります、結構一杯一杯かなと思います。その中で、やはり一番、今、力を入れて、手を入れて、ある程度の効果ができるのは、先程からずっと出ている家庭学習だと思います。これも調査が始まって、それこそもう10年以上経って、ずっと高砂市はその家庭学習の面でややデータが悪いというのはずっと一緒ですよ。我々はそこを知らながら、手を打っているつもりでも打ってなくて、例えば今回のリーフレットにも、家庭と学校が協力して家庭学習を充実させましょうという文言があるが、では、どうやって保護者は、うちの子どもにどんなことをさせたらいいのという具体策がやはり見えてないから、特に中学生になると、実際には自分が教えることもできないし、ただ、学校が具体的に、今こんな授業をやっていますので、こういうふうなことを見てくださいますとか、この辺で結構つまづく生徒が多いので、ここを少し手を入れてくださいますねとか、そういう具体的なことを細かく繰り返して情報発信するというのが必要かなと思います。

そのためには、例えば一番いいのは、学校だよりとか学年だよりというのが月1回は出ていますから、その表面はずっと今までのことを書いていって、その裏面に、今こんな家庭学習、こういうことをポイントに気をつけてくださいますねというようなことを細かく載せていくとか。あとホームページも使えるかなと思うのですが、少し今の本市の小中学校のホームページを見させていただいて、やはり家庭学習に触れているのは、竜山中学校は結構細かく触れてありますが、意外に少ないですよ。行事とかはもちろん載せているのですが、家庭学習、評価の方法、今こんなことをしていますとみたいなこと、細かく載せているホームページは少ない。ですから、そこも改善の余地があるのかなと思ったりします。そういうことでいけたら、もう少しは変わるのかなと思ったりします。

あともう少しですが、部活動等が、今回の資料も、学力向上のすぐ後ろに部活動のノ一部活デーが出てきて、そのデータがあると、いかにも高砂市の学力の伸び悩みは部活動であるというような資料づくりだと私は思うのですが。当然、やり過ぎは絶対だめです。部活動はヘロヘロになるまでやってはいけません。部活動が、国からもいろいろ数値が出されていますが、働き方改革ですか、教師の働き方の面に出てきている数字であって、決してその学力と結びついた形で出てきていることではないと僕は思っています。

もう一つは、データですが、十数年、ずっとこの学力・学習状況調査をやって、10年前と比べると、今ははるかに中学校での部活動の実施日数、時間は減っています。間違いなく。では、部活動が本当に主たる原因であれば、当然、数値は上がってこないと駄目ですよ。でも、今回はそうならない。だから、部活動がやり過ぎてはいけません。適正に、その適正という部分が、どの時間が、どの日数がという議論があろうかと思いますが、部活動をやっているからこそ学力が付く。僕は、結果的には、学力は体力だと思います、究極的に言えばね。だから、本当に勉強しようと思うときに、集中力を持って、忍耐力を持って、頑張る力はやはり部活動で随分養われていると思っただけで、自分が持っていた部活動でも、3年生の2学期以降ずっと伸びていく。それはやはり部活動で培ったその心身の力というのがそこで働いているなという思いを持ちますし、先程の補充活動も部活動で朝練習の時間に補充学習をみんな集めてやる、そういうところもたくさんあります。ですから、部活動を考えなければいけない、そういうのはもちろん僕、大賛成です。教師のしんどさも含めて、子どものしんどさも含めて。でも、そこにあまり特化していただきたくないなという思いがします。

○山名教育委員

一言だけ。やはり中学生の体力、中学生のいわゆる筋肉とか、いろんなそれなりの能力を考えたときに、1日2時間か3時間、やはりそれは何でそういう数字が出てくるかといったら、それだけ非常に鍛えたら過労につながるし、疲労につながって、筋肉疲労を起こるし、骨の発達、いろんなことに関してもやはり問題がある。だから、適切な、いわゆる有効な運動スタイルとして、週4回ぐらいやるのが、いわゆる筋力、それなりの将来に影響のないレベルでの筋力あるいは技術の向上につながるの、そういうのを無視して、ただただやれやれ、1日3時間、それを丸々1週間やるとか、1日、土曜日、日曜日、10時間練習をやって試合をやるとか、そういう形がいまだに残っていること自体が子ども、それで、なぜかというたら、中学校、高校へ入って、そうしたら今度、大学へ入って、一流のあれになるとときには、もう完全に駄目になっているという形になるわけです。結局、もう無謀なスポーツをさすという形、いわゆる鍛えて、それだけの子どもの年齢に応じた運動の仕方というのをやはり考えてみたら、実際はそのぐらいが、言われておる、文部科学省、スポーツ庁から出した、やはりそれは正しいと思います。週3回か4回でいいと、それで3時間でいいと、それで、きちんとした指導をされれば、有効な発達があつて、技術も伸ばせられる。それをむやみやたらに毎日毎日がむしゃらにやるスポーツは、そうしたら、それは本来の教育的配慮から考えたら、クラブ活動とは違うということになるわけです。がむしゃらにやって、変な弊害を考えれば、ある何人かの要するに将来、スポーツ、プロ野球選手になりたい、あるいはスポーツ推薦されたいという形だけのふう引張られているような形あることもなきにしもあらずだし、もう本当に成果主義で、成績が出たら、うれしいのが分かって、それで成功感を味わせて、先生の言うように、勉強、それらにもつながって達成感があるから、勉強もやって達成感があるという、成功経験があることで勉強もできる、そういうことも事実は事実ですが、やはり過剰な疲労、疲弊しているような形では勉強もしにくい、勉強に対する影響がやはり出ると。必ずしもだからスポーツをやったからいいとは限らない。やはり適切な運動であつて、適切な状態が、今はっきり言って、倍以上の運動をやり過ぎていると。だから、やはり少ない時間でも効果的な運動をしたら成績が出せるだろうし、要するにスポーツ大会があまりにも多過ぎるといのは、やはり問題があるので、そういうのはやはり減らさないといけない。スポーツと学力が完全に一致するわけではないと思いますが、思い切った姿勢を打ち出そうよという形でいったほうがいいのではないかという気はしています。

○布施教育委員

今の引き続きですが、スポーツ省のガイドラインというのが出ていますね。これは週2日の休憩をとるといこと、それと1日2時間で、週末の土、日は3時間をあげる。長期休暇のときは、それにあわせて休みを取るとか、そういうのがスポーツ省から出ているということは、やはり真剣に考えなければいけないと思います。それは働き方改革もそうですが、実際に山名先生が言ったように、よく私も、うちが医院なので、子どもたちの話を聞いたときに、やはりへとへとで勉強するような体力が残ってないと言っている人もいます、結構多く。そういうのはやはり時間も必要だし、体力も必要だと。あとやはりガイドラインもあることだし、それにあわせてやっていながら、遊びの時間が必要だということではないのです、勉強をしなければいけない。勉強するための、クラブを一生懸命やっている人は、遊びの時間も少ないかもしれないが、勉強する時間も少ない。クラブをやっている人は、もちろん遊ぶ時間が長過ぎるとい両方を考えていかなければいけないので、それはまず、ガイドラインに従ったやはり部活というのものもひとつ目指さなければいけないだろうし、それにあとは、遊びの時間を増やすわけにい

かないから、それにプラスして勉強させる時間、家庭学習ですね、それをプラスさせるにはどうしたらいいかという、多分、今、皆さんの子どもたち、今の状況はゲームする時間があり余っているのではないかというような。

昔、私なんかが中学生のときには、宿題をやっているの一杯一杯だったような気がします。もっと宿題を出されていたのではないかなというのが、中学生のこのアンケート、小学生から中学生に向けてのアンケートで、逆に言うと、何か中学生のときには、まだ意欲も勉強しようという感じのところがあったのが、何か下がっているような、勉強意欲が下がっているような、逆に言うと、一般社会で考えたならば、中学生の時期というのは、一番自分の人生の選択、道がどう行くかという大事な時期にあるにもかかわらず、中学生で全国的には勉強する時間が増えているにもかかわらず、高砂市の場合は逆行しているような感じがします。そうすると、やはり昔みたいなスパルタ的なやり方も必要ではないか。ゆとりゆとりで大分楽になってきていると思います。昔はスパルタで、やれやれといって宿題を出されて、宿題を出さなかったら、また補習だとかいって厳しくやられていた。そういうのはやはりやる子はやるだろうし、やらなかったら、もうそれを強制してやらせるというふうなことも必要ではないかというふうに思います。

だから、例えばほかの都道府県で、すばらしいワークというのをつくって、オープンにしているところもあるし、高砂市はワークもあるとおっしゃいましたけれども、まだまだ陳腐ではないかというふうに考える、そういうところをいかにして、そういう宿題なんかをやらせながら学力向上にもっていけないかということも考えたほうがいいのではないか。時間があり余っているからこそ、ゲームをしてしまうのではないか。時間があり余らせるようなことをしなければいいのではないか、スパルタを私は推薦します。

○登 幸人市長

ほかにございますか。

○吉田教育委員

とにかく平均点を取れないというのはかわいそうだなと思います。自分の子どもだったら、平均点を取れないのなら、何とかしてあげないといけないと思いますよね。どこが分からないのか、一緒にもう一回教科書を全部見て、分からないところがあったら、自分で教えるし、無理だったら誰かにお願いするとか、何とかしないとして、やはり平均点というのが一つの目安のような気がします。それ以上望めればもっといいですけども。何かそれができないということは、やはりこれは一生懸命になって考えないと、余りのんびり構えられない状況。

これは数年前から思っていたのですが、やはり自分の子どもや子どもの周りの状況を見ても、部活動は確かに高砂市はきついと思います、時間的に。内容がきついというよりか時間の制約がきついと思いますね。ですから、時間は、寝る時間と食べる時間はまずちゃんとあげないといけないし、それから、考える時間もあげないといけないし、だけど、時間をもらっても、今の部活に追われている子どもたちは、時間をもらうと、ふだん遊べないので遊んじゃうんですよ、もらった時間で。勉強を、引退して3年生になって、さあ時間いっぱいあるよという、今度、えっ何を勉強したらいいのか分からないと言います。勉強の仕方って教えてもらうものではなくて、自分で編み出すと思っています。それはどこでやるかという、小学校のうちに宿題をやったり課題をやったりしながら勉強の仕方って覚えると思います。小学校のうちにそういうことをちゃんと身につけてないのかな。1人勉強の仕方というのがちゃんと身につけられてなくて、それで中学校になって、時間ないし、だけど、あってもやはりやり方が分からない。小学校は小学校でいうと、その小学校にそういうことをしてほしいのですが、それ以前にち

ちゃんと座って話を聞くとか、そういうことができない子が多くて、その規律のほうに時間がかかってしまう。授業にかける時間がやはり少しずつ減るのではないかな。ですから、本当は一つ一つずれて遅れてきてしまっている。就学前にちゃんと座って先生の顔を見てお話を聞く。手を挙げて、許されたとき以外は、私語はしないとか、そういう基本的なことができないまま例えば小学校へ上がってくるわけですね。先生は、教えたければ、教える以前に規律をまずちゃんとしないといけないということで手いっぱいになってしまう。小学校のときに、自分の勉強というやり方を覚えてほしいのに、それを覚えないうまま、今度、中学校へ行ってしまう。中学校へ行ったら、時間があっても自分で勉強ができない。最初からずっと何かずれ込んできているような気がしますので、やはりそのところを、その年齢ですべきことを、脳科学でも、前頭前野という大事なところは、生まれてから3歳か5歳までに一気に能力が上がって、あとフラットで、今度は10歳から18歳で一気に上がるという、その一番大事な就学前の時期というのですか、生活のリズムも3歳で決まるとかいうので、その時期に社会全体で、親もですし、周りの大人も、それから、こども園、保育園、幼稚園の先生方もみんなでもって、その子どもの将来の大切な生きる基本みたいなものをきちんと整えていただいて入学さすということがまず大事だと思いますし、小学校では、勉強の仕方を覚えるということに徹底できる環境をつくっていただいて、必ずしも親がついて勉強してくれる子ばかりではないので、1人で勉強できるように、小学校で6年間かけて教えていただいて、そうしたら、中学校になったら、自分でどれぐらいかけて勉強すれば、自分はできるかわかっていますから、部活が無理だと思えば、部活辞めてでもするでしょうし、その判断もできると思うのです。その辺のところをやはり下からきちんと固めていかないとだめかな、親もその意識を就学前からちゃんと持ってやっていかないとだめかなと思います。

○登 幸人市長

ありがとうございました。

○山名教育委員

いいですか、ついでに、

○登 幸人市長

はい、どうぞ。

○山名教育委員

今、吉田委員が言った、結局、3歳児教育の問題とか、よく小さいときにいかに興味を持たせて、いろんな話しかけて、いろんな問いかけをしながら、子どもに対してのいろんな興味を持たず、そういう今、例えば次の学童保育という問題が出てくるのでしょうか、結局、保育園、幼稚園や、共稼ぎ世帯でなくて、幼稚園の中で、あるいは私学も公立も含めて、そこでいかに教育してもらえるか。そういう3歳児教育の重要性というのは、非常に最初の取り組みによって、それなりの脳の発達度合いがすごく変わる。それで教育に対して、いろんなことに対して興味を持って、いろんなことが、それも家庭環境云々と言われたら困るのですが、みんな一様に与えられるような環境をつくってあげたら、それは将来に対して、3歳児教育の状態、充実した状態、それなりの方針に基づいて進めていければ、それは何年か後には、やはりそれなりの子どもたちのレベルアップは図られる、教育に対する学問がそれなりに、いろんなことに対して興味を持っていて、勉強するスタイルも当然出てくるだろうし、そういう形をどんどん形づくっていく基礎づくりが大事だと思います。だから、それで、こども園の問題とか、いろんな

ことがあって、あと話題になったら言いますが、やはり充実、いかに教育の質を高めて、教育のいい環境もつくって、子どもに刺激を与えていくか。やはり子どもが自立していくような、いわゆる自分で思える、それがどんどんできていく。そうしたら、就学前のときに関しても、結局、そのときにはもう既に、家庭学習の中で、いわゆるできる人ってどういうことかと、今、問題になっているのは、収入が多い子は結局、学力が高くなるというのは、やはり手を加え方が違うのだと、時間的余裕があるから、お母さんがやはり時間的余裕があって、どんどんされていく。いわゆる環境がある。それが共稼ぎの方々は、例えば、共稼ぎ全てではないのですが、結局、余裕のない方になると、やはりつつい子どもを放っとかし、あるいは預けっ放し、要するにそれに対しての預かったところの教育の仕方としての質の問題が出てくる。

だから、学童保育でも、結局、今日でも聞いたのが、先走ってしまいますが、教育配慮があるのですかと言ったら、ないと、要するに、ただ預かって、いわゆる保育するような形だけだと。それだったら、結局、小学校6年間の放課後の時間の勉強の仕方にしても、あるいは家庭内学習のことに、どこまで身につくんだらうなということがあつたりすると、そういうのが増えてくると、やはりそれも少し微妙。そこにいろんなことをやってくれる、それなりの預かってくれる施設、そういう団体だったら好ましいなどは思うのですがね。期待することは非常にあるのですが。そういうのをやってくささいといつて、宿題一つ、きちんとその間には全部こなすということを経験づけてくれるとか、そういうことをやってくれば、またそれはすごく高砂全体の中のその子どもに対する勉強のあり方、教育のあり方というのは少しでも変わってくるかなという気がするから、そんなのを含めて全部考えていかないといけないかなという気がする。だから、小さいときの勉強の仕方、絶対これを今日はしなければならぬのだという形、だから、宿題は宿題で与えられたそれなりの予習、学習というのは、もう完全に身につくように形の教育されてきて、その慣れが出てきている子は進んでいくけど、ある日突然、中学校でクラブがなくなったら、言われたように、勉強の仕方が分からない、それはやはり周り人たちの教育の仕方がおかしいだらうと思うし、子どもも、もう少しそういうスポーツ漬けのことにうつつ抜かし過ぎたという反省があって、しっぺ返しをやはりそこへくるから、少しかわいそうだと思うからね。みんなでそれなりのシステムづくり、だから、逆に言うたら、スパルタ教育かどうかわかりませんが、結局、前から言っている、毎年、市内での学力テストというのは昔あった分、再開してもいいのではないかと、いわゆるテスト、全国の学力検定だけではなくて、市内でのVプランの中で、はじめ高砂市内もやはり市内には学力検定テストというのがあった、このようなものを再開するような形。また、学校の先生方も、成績、変に成績オンリー、数字オンリーだけではなくても、やはり弊害もあるかもわかりませんが、やはり地域改革で、やはり成績を取るためにどのような勉強のさせ方がいいのだからということをもっと真剣に考えてくれるのではないかなと思います。初めのうちは、無理やりでもしていくことによって、勉強スタイルというのがわかってきて、何をしたらいいのか。余裕がないと、考える力が出てこないと思います。

○登 幸人市長

いろいろとご意見、全くそのとおりで思っています、今日、それで結論というのか、こちら側の私のお願いというのか、こういう形で取り組んでもらえませんかというのが、先程皆さんが言われた内容そのままです。

一つは、教育委員会がやはり一つの方針を示して、目標を示して、それをしっかりと各小中の学校長あるいは先生方に伝えると、その進捗についても、きちっと教育委員会が見ていくと、見ていって、だめなところはだめとはっきりと言っていくということが

大事なのではないのかなと。そのときに、ここにありますような、例えば学習のめあてを明確にして、学習したいことをまとめさせたり、振り返らせたりしますとありますが、これは具体的にどうするのですかというのが、学校の先生で、これを言って、ポイントはこうやと言っても、学校の先生一人一人、100人いらっしゃったら、100人違うかなと、やり方も何もかも。それはそういうことがあっていいと思います。現場はやはり教師に任さないといけないから。だから、教師に任せて、任すけれども、やはり同じ目標を持ちましょうと、同じ方針に向かって一緒に進んでいきましょうと、目指すところは一緒ですよというような形を、まず教育委員会がしっかりと枠をはめてでもいいから、言うべきと違うかなと、そのように私は思っています。具体的なことで、この学校については、今の状況はこうだと、今までの点数の結果とか、試験の結果も学校にはあるはずですから、その学校ごとでちゃんと分析して、何がどうなっているのかというのはやはり見ていただきたいなというふうに思います。

ですから、教育委員会とすれば、やはりその目標と私、言いましたように、数字目標も大事だと思います。例えば全国の平均正答率、兵庫県の平均正答率、平均でいいのかという問題もあると思います。平均より上へいこうというのは、やはりそれは平均でいいことはないと思います。平均より最低でも5%は上回っていこうとか、そういう目標を立てるべきと違うかな。具体的にもって行ってね。というのが大事になるのではないかなというふうに思います。

それと、先程言われましたように、補習授業とか宿題を増やす、これも先程の家庭の中での学習はどうなのかと、学校がそこへ、家庭内での学習を学校がきちっとそれをコントロールしていけるような状況をそういう形につくっていくというのも大事だと思いますし、やり方はやはり学校の先生のほうがそこら辺はよくご存じなのかなと思います。ただ、それを教育委員会が、教育委員会も任せてしまうのではなしに、きちっと吸い上げて、把握して、そうしたらそれでいこうと、あなたの所はこれでやってください、あなたの所はこれでやってくださいというのが、やはり一つ一つの指導をしていくのか、それが大事ではないのかなと思っています。

ですから、先程いろいろご提案ありましたが、そういったものも教育委員会としてひとつまとめて、各学校にそれぞれ通知をしていく、そして、やっていただく、現実にやっていただく。その結果として、毎年、数値的には出てくるわけですから、その傾向を見ながら、またそれを修正していくということが大事なのかなと。先程、危機感と言われましたが、本当に危機感を持ってもらいたい。小学校の6年間で全国平均より下だということは、全国平均で高砂市内の小学生が全部全国平均の点数しか取れない、そういうようなレベルにあるのだということになります。もっと悩ましいのは、中学生です。中学校3年生が9年間の成績で、高砂市内で教育を受けたら、全体の平均点以下だということが言われてしまいます。それはやはり、先程言いましたように、子どもにとっては、一番かわいそうなことだと思います。だけど、それを学校がしっかりと受け止めて、教育委員会がしっかりと受け止めて、それで、具体的には本当に何をするか。先程言われましたように、1箇月に1回、テストをしてもいいと思います。習熟度を図るという意味合いでね。それで、到達していない生徒に対して、児童に対しては、やはり補習をしていくとか、その個別のそういう指導もやはりやっていただけたらなというふうに思います。

それで、これから働き方改革の中で、一番クローズアップ、学校の先生をされていますが、学校の先生がそういうような今の拘束された時間が、抑制されてというのか、拘束時間が少なくなっている。少なくなってきた分、やはりそういう方向へ、言われましたけど、向けていけるように、本当に教育委員会がきちっと指導していく。命令してでも構わないからやれということやっていただかないと、なかなか学校は動かないのか

なというふうにも思いますので、ひとつそういうことを一度、教育委員会で本当に具体的にやってもらいたいというのが、今日私、言いたかったこととございまして、それぞれ言われましたが、まさしくそのとおりでと思います。この学力については、一応そういう形で一遍取り組んでいただけませんか。これは来年では必ず、来年といたらもうすぐやね、それに間に合わなくても、もう1年後とか。ですから、それをひとつお願いをしたいというふうに思います。今年4月から間に合わなければ、2学期からでもよろしいし、途中からでもできるというふうに思いますので、ひとつそういう形で、真摯に受け止めてと書いてありますから、真摯に受け止めていただいてやっていただきたいというふうに思いますので、よろしく願いをいたします。また、教育委員さんもそういうような形で、できたらお願いできたらなと思いますので、よろしく願いします。

もう一つ、学童、生活習慣、学習環境も少し今、話が出てきましたので、また今も、先程言われましたけど、教育委員会として、具体的にはこういうふうな形で取り組んでいきますというふうな話もありましたので、それはその延長の中でやっていただいたらなど。ここに保護者PTAに向かって、こうしてくださいと、先程学校に対して指導すると言いましたが、PTAに対しても指導してもらったらいいのではないかなというふうには思います。そういうことで、ひとつよろしく願いいたします。とにかく上げるということが大事だと思います。

○衣笠教育長

今、学力向上の手だてのところをまとめているのが16ほど手だてはやっているのですが、あまり多過ぎてぼやけているところもあります。絞って、これをやるということで具体的にまた動きたいと思っています。

○登 幸人市長

私、地方創生とかなんか言っておるでしょう。三つやはりあると思います。地方創生で人口を増やす、若い子どもさんに来てもらうというのは、増やすというのは何やといたら、一つはやはり暮らしです。高砂市内はもう大都市に近いし、いい場所だと思います。温暖だしね。水害に少し弱かったから、その部分は、200億もかけてやろうと今やっています。安全・安心をまず創る、生活に災害の不安がないまち、安心できるまちがまず大事だと思います。

それと、もう一つは、教育です。教育レベルが高い市というのは、やはり若いお母さん方、絶対、選択肢の中の上位に入ってくるはずです。

それと、あとは子育て、子育て支援でどれだけのメニューがそろっているのかということもやはり選択肢の大きなウエートになっていると思います。ですから、私は、教育と福祉と安全・安心というのがやはり地方創生の、まず市がきちりと整備をしなければならぬものかなというふうに思っていますので、教育あるいは幼児教育、先程出ましたが、今、こども未来部が担っていますが、こども未来部も幼稚園と保育園が一緒になっただけでこども園やと、一緒になっただけでなしに、3歳児教育を入れたわけですから、3歳児教育は何のために入れたのかということ、やはり3歳児からしっかりとした教育的な指導、あるいは教育的な保育かもわかりませんが、そういったものを教育という要素をその中に入れていこうということを入れていますので。まずそれが全園でできるようにということで、こども園化も進めていますので、それはそれでまた小学校、中学校だけでなしに、こども園、幼稚園でもそういう方針のもとで方針を立ててやっていただいたらなというふうに思いますので、ひとつよろしく願いします。

また、小中一貫だとか、あるいは教育環境でいろいろ整備していますし、あるいは貧困対策といったものもこれから大きなもの、クローズアップされてくると思います。そ

の子どもさんが何らかの理由で教育を受ける機会がなくなるというのは、やはり不幸だと思いますので、それは行政としては、やはりしっかりと守っていかないといけない部分だというふうに思います。ただ、学校へ入ったら、やはり学校がしっかりとそれを受け止められるというふうにお願いできたらなというふうに思います。

学童ですが、学童で少しお尋ねしたかったのは、教育委員会としての学童に対する姿勢なのですが、学童、どちらかといえば、今まで福祉部、今はこども未来部で所管です。今までと同じように、保育園と幼稚園、これはどうしても壁があるから、これを取り除こうということで、こども園という形に今進めていっていますが、その子どもさんは3歳、5歳、保育園でいようが、幼稚園でいようが一緒ですから、ですから、そういう意味合いの中で、こども園ということで教育的要素を入れるということで取り組んでいますが、学童も小学生なので、私は一緒だと思います。ですから、その小学生の児童を学校の中で、学校の正規の時間については学校が責任を持って預かるが、帰ったらもうそれは学校の責任ではないみたいなことではなしに、家庭環境とか、そういった環境は子どもによって違いますが、やはり家へ帰っても誰もいない、見ていただける人がいない。ですから、そういったもので、小学生の子ども、小学校で預かっている子どもさんがそういう環境にあれば、小学校でもやはり少しは責任を持って見ていただけるような環境づくりをしていただきたいなど。ただ、今も協力はしていただいていますので、空き教室等々で活用させていただいてね。ただ、先程申し上げたように、これから学童保育を希望する人はもっと増えてくると思いますわ。増えてきたときに、今のままでは施設が足りない。そうしたら、学童保育所をまた設置しないといけない、新たにつくらないといけないという問題があります。そのときに、学校で今一杯一杯であれば、新しくつくらないと仕方がない。あるいは空いている、今であれば、民家でも借り上げてやっていただいています。そういったことの中で、市も、これは将来的な課題として、小中学校、中学校は中学校、小学校は小学校にあります。公共施設のあり方ということで、今これから大きな議論になっていくと思います。その中で、小学校については、生徒さんの数に応じた形で、学校の施設面積自体を縮小していきましようということなのですが、もし学童が増えてきて、その小学校で例えば預かるというふうな方針がいけるということであれば、縮小はやはり少し考えなければいけないのかなというふうにも思います。その辺もやはり将来、10年先、20年先を見た中で、どうしていくのかということもやはり視点も必要かなというふうに思っています。ですから、少しこれは、教育委員会としても、今現在もそうですし、これから先も学童保育に対しては、今以上の協力体制を敷いていただけないかなというふうに思っています。その辺、少し認識だけいただいたらと思っています。

○大西教育部長

学童の保育所の教室の関係でございますが、教育部といたしましても、29年4月に、学校における余裕教室活用ガイドラインというのをつくらせていただいている中で、当然、この学童保育に関しましても、今までの過去の経緯と学校の・・・の必要性、また、国の方針とか、児童の安全性という観点から、余裕教室における第一優先順位、学童に関しては、余裕教室を活用するという一応ガイドラインは作成をいたしており、学童の絶対必要であるということは認識して、今後もその辺、学校のほうの協議、学童のことは、協議に関しても教育部の中に入って進めてまいりたいというふうに考えております。

○山名教育委員

すみません、いいですか。

○登 幸人市長
はい。

○山名教育委員

未来部へ質問をしたいのですが、これは先程の学童保育の中で、伊保小学校の分の真浄寺こども園がやっている分に関しては、ちらっと聞いたとき、この真浄寺こども園の卒園者だけに限り預かりますと先程言われましたように聞いたのですが、これは不公平ですよね。伊保小学校を借りている。真浄寺保育園の卒園者だけをそのようなところに貸すのは、まかりならんと思いませんか。

○福原こども未来部長

真浄寺の施設を使って、真浄寺の卒園者のお子さんだけを預かっている。

○山名教育委員

伊保小学校の分は、真浄寺がやっているのでしょうか。そこはもうフリー。

○福原こども未来部長

伊保小学校区の子どもですが、真浄寺を卒園した子を真浄寺の園舎内で学童保育の部屋を設けて預けていると。

○山名教育委員

それでは、伊保小学校で運営しているのは、NPOのきっずスペース。

○福原こども未来部長

そうです。

○山名教育委員

ああそうですか、ごめんなさい。はい、わかりました。

○衣笠教育長

学童は、学校が終わった後の家庭にかわる子どもの生活の場というのか、居場所というふうな認識はしていますし、その学童に来る子は、この学校の子どもたちが来るわけですから、今おっしゃったように、学童保育と学校がきちっと立場は違うが、連携するというのが大事ななというのは実感として思っています。

ただ、やはりこの資料の4ページにもあるように、例えば曾根なんかでしたら、空き教室で専用で学童が使っている。それだけでは不十分なので、2階にある家庭科室、作法室、畳の部屋を併用して、そこは高学年の子が宿題したり学習するという形で併用して使っているというのが、今のところ、そういう形で学童さんにも少し不自由な思いをさせた形で使っているのは事実です。学校の立場でいうと、校長先生方の話を聞くと、そこに来るが、土曜日に2階へ上がってきて、2階へ上がってきたままに別のところへ行ったり、廊下で遊んでいて、トイレを開けたら、セコムがかかって、セコムが鳴ったために、土曜日、学校側が呼ばれるというふうなことがあって大変という苦情めいたことを聞くのですが、そこは、何かそのとき聞いたときに、まだやはり十分連携ができていてお互いに気持ちのうえでお互いに自分の学校の子なんやから協力してやっていきましようねという、共有できるような気持ちができていれば、そんな不満になったりしないから、そのところも単に体制をつくるとか、連携とかという言葉だけでなく、精神

的にも仲よくやって、一緒に子どもたちを育てましょうと。教室で見れない姿を学童の中でリーダーシップを発揮している6年生、こんな姿が見えましたよということで、結構、私が校長をしているときは、そんな情報もいただいたりしながら、学童さんと仲よくすることがまず大事ななということでスタートしていますので。そのあたりも今少しその辺がぎくしゃくしているようなところもありますので、そこもやはり解消していくためには、もっとコミュニケーションをとったりして、お互いに共用部分は貸しますが、ここは譲ってね、ここは少し気をつけてというふうな話し合いをまた持つような機会がやはり、今ありますか、その協議会という、学校と学童さんが話し合うような機会を持つというのはありますか。

○福原こども未来部長

一応、お部屋をお借りするときに、もちろん学校のほうへ出向いて行って、こういうふうな使い方をします、トイレの話であるとか、部屋の使い方等にも教頭先生のほうからお話を聞いてしておりますし、学校のほうも学童にお貸しいただくときには、教職員の中で会議をされて、しているということは聞いております。

ですから、きつずスペースも行って、もちろん一緒に学校と話し合いの中で、この部屋を借りたいという協議はさせていただいております。

○山名教育委員

いいですか、もう一つ。きつずスペースのこの運営のあり方を見まして、結局、日々の運営の状態に関して、スタッフが今聞いたら、2人で40人の子どもを見られているという形ではありますが、80人いれば、4人で見られているという。その他いろいろなもろもろのことをするとき、学童保育で預かっている保護者に対するいろんな強要部分、やっていただけませんかとか、いろんなそういう取り組み的な、実際にはきつずスペースの中の学童を預かるにあたっての、結局、ギブ&テイク的な義務などが出ているのだろうと思いますが、それなりのことのそういう契約内容的なもの、把握はされていますか。

○福原こども未来部長

そういった教育的なことで、保護者とは契約をしていますし、こういった使い方をする、学童保育でお預かりするというふうなことは、事細かく保護者とは相談もしておりますし、また、それぞれの学校のところで父母の会というのがございますので、父母の会と、それから、きつずスペースとの協議というのもされているということは聞いております。

○山名教育委員

実際聞いた話で、学童保育に預けるのは預けてもらっていいのですが、結局そうすると、それぞれの働かれている親のいろんなケースによって、その学童保育そのものに対してのいわゆるNPOでやっているから、それに対していろんなことの協力してくださいという形とか、それでいろんな・・・みたいな形でやはりやっていただけませんかとかいうような強要があったとかという話も聞くのでね。だから、学校を使って、施設を使って、学童保育をするのはいいのですが、その運営自体として、きちっと運営として、いわゆる聞いているような形での、子どもを健全な状態で預かって安全な状態で預かっていくと。僕なんかは、その中で、教育的な介入もあってほしいなど、その間にいわゆる先程の流れで、宿題をするような時間帯を設置してもらおうとか、食事の与え方にしても、無条件に持ってくるお菓子の制限なしにすごく沢山持ってくる子とか、全然持

ってこれない子とか、いろんなそれに対する配慮もいろんなことをやってくれているところとやってないところとあるのは聞いたことがあるので、それなりの実際どんなふうに行われているかというのを現状把握というのはやはり必要かなと思います。学校の中でどんなふうに行われているのかと。実際、貸しているのは、市長が言われるように、働き方の改善で希望者がいっぱい増えるから、教室を貸すことは県と教育長含めて現場でしてくれるのですが。そうしたら、その中でやっている学童保育に対しての実態をやはり把握していないと、知っていないといけないかなという気がします。その辺を事細かく一回調査して、預けた保護者の方で、やはり目に見えないところ、預かってもらっているから、声に出さないが、何か非常におっくうに思うことがあるとかということが伝わってくるのですが、そういうことをきちんと知って、それなりに、本人がいなかったら、やはり運営に対して、そういう仲介的なそういうことの関与、全体的な高所からの管理的なものをしてあげないと、いびつな形になっても困るしということだと思います。その辺の管理、実態把握してどうなっているかということ、よくわかってほしいなと思います。お願いします。

○福原こども未来部長

学童さん、NPOと保護者、父母の会との話し合いというのも先程言いましたように行われておりますし、また、学童を行っているNPOと行政のほうとの話し合い、協議というのも行っております。

また、父母の会のほうから、何か市行政に対しての要望というものがある場合は、NPOを通して行政のほうにあがってくるようなこともございます。

そういった要望もあがってくるのですが、実態はやはり行政のほうも知っておかないと、どんな現状かということもありますので、各学童さんのほうには、年に何回か実際、学童されている時間、また、ふだんの学校がある日と夏休み、もちろん夏休みもお預かりしていますので、そういったときにどういった状況になっているかというようなことは、出かけて行って把握をしているような状況でございます。

○登 幸人市長

最初申し上げたような趣旨で、少しお伺いしましたので、教育委員会やこども未来部だけでなしに、教育委員会も一緒になって、この学童について対応していくという姿勢は大事にさせていただきたいなと思いますので、そういう点でよろしく願いいたします。

一つ気はなつたのですが、阿弥陀の学童保育も小学校の教室を使っている。多目的室。あれは学童用に建てたでしょう。足りなくなったのですか。

○大西教育部長

はい、足りなくなったのだと思います。

○登 幸人市長

見込みが悪かった、甘かったのかな。小学校を建てる時は一杯一杯建てているはず。これだけの生徒がいるから。それで、学童保育用のプレハブを建てたと思います。だけど、もういっぱいになって。

○大西教育部長

それ以上に学童保育の方が。

いかなというふうに思っています。ただ、施設を高砂市として少なくするときに、小中学校を例えば10校、6校、これをどうするのかという話の中では、私は、考えていますのは、小学校、中学校、基本的には減らせないであろうというふうに思っています。統廃合すれば一つ減る、二つ減るということもあろうかと思えますけども、小学校は、子どもにとっても、大人にとっても、その地域の中核となる私は施設であると思っていますので、それが教育施設ということでもありますから、ある意味での継続性は、その小中学校自体に持たせてもいいのではないかなと思っていますので。子どもの数が減ったから、小学校はやはり統廃合、廃止だということのほうが小中学校の教育そのものを数字合わせで考えてしまっているのではないかなと思いますので、そこは少し私はそういう方法は否定的で考えております。

ですが、一方で、こども園自体は、やはり先程言いましたように、公立と民間とどう違うのかといっても、やはり民間は民間で特色ある教育をされていますので、そういうことで市が全く民営化しても、市が関与しないということではございませんので、そういう意味合いでは、民営化もありかなと。今まで保育園については、民間移管ということで、3園か4園、していると思いますので、その経験といいますか、そういったものも、こども園化したとしても、そのうちの何園かは民営化するということで、市民の人も受け入れていただけないのかなというふうに思いますし。民間でまずはやっていただく中で、公立はそのうちの市内の中の例えば基幹園みたいな位置づけにして、民間で例えば受け入れられないそういう子どもさん、あるいは民間ではなしに公立へ行かせたいという親御さんの希望を受け止められる最低限といえ、市内4つかなというふうに思いましたので、そういう意味合いで、半分は民営化という方針を立てました。

○山名教育委員

要するに、先程言われた私立の特色あることで、いわゆる営業努力だと思うのですが、やられている。そういうときに、公立の園の先生方に聞いたときに、何でできないのですかねと聞いたことがあります、何人かの方に。そうしたときに、何がなにかといえば、やはりお金がないと、教材費が出てこない、教材を出してくれない。いろんなことをやりたい、音楽的なこともいろんなことをやりたいと思うが、教材費が全然予算で通ってこない。実際プランがありますかといったら、やはりある人もいたりしました。そうしたら、結局、こども園化して、保育料がそれなりに値上がりしたこともありますよね。そうしたら、それをフィードバックしてもらって、今言った、公立であっても特色あるような形のこども園の運営というのが、園長以下の先生方によって、やってもらってもいいのではないか。それなりのフィードバックするためには、やはりそれなりの教材費を渡してあげてくださいということを言いました、未来部にね。それで、実際請求があるかどうか知りませんが、それなりの、やはり先生方、請求しにくいかもわかりませんが、何かそういうのを与えていっていくと、各学校、こども園が充実した形になっていくし、それで、今、私学に同等に、それなりに教材がそろえばできるかも分からない。

それで、私学と公立との違いでは、公立のほうに関しては、できるだけ正社員化していこうという形でされている、努力していただいて、結局、正社員になって、その3歳児教育に関しても、やはりそれなりの教育をやっている。私学のほうも努力されて、正社員の方がいっぱいおられるところもあるかもわかりませんが、やはり非常にパート的な形の方がおられて、経営上の問題として、本当にきちんと何年間もずっといて、正社員として、結局、正規の教諭としてやられている方がどれだけいるのかなという形で、内容的には、見た目には、華やかにいろんな太鼓をやって、すごいことをやられている、いろんなことをやられてしている、そういう中での教育内容もしっかりし

ているものもある。園長のすごく崇高な教育理念に基づいてやっておられるところもあるし、そうかといえば、やはり全然それが本当に少し困ったねというところも現実には私学にはやはり格差が大きいという形がありますよね。こういうのがあるから、当然、こういうのを受けられる私学のところは、しっかりしたところが当然、受けに来るのだろうとは思いますが、やはり3歳児教育とかを考えたときは、僕はいまだ一抹の結局、私学に任せていくと、高砂市の方針としての分が、今言われましたように、私学のほうに関して、教育委員会からのいろんな不安への、未来部からにせよ、意向が伝わっていく、協力していくと言いながら、なかなか連携がうまくいかないところが出てきている。そうしたら、子どもの高砂市の教育を考えたとき、高砂市内の3歳児の公立、私学の比率を考えていったら、私学のほうが逆に言ったら7割ぐらいになってきて、公立が3割ぐらいになってしまって、その中で、3割の中で、高砂市の教育委員会、それなりの方針に従ってやっているところは3割しかなくなってしまうたりしたら、それもやはり悲しいかなという、いわゆる未来部に対する就学前からの小学校時からの世代もやはり連携していただいて、本当に連携で話にのって一緒にやっていただければいい、そういう土壌をつくらないといけないと思いますが、民間移管すると、それなりに難しい問題が出てきそうな気もしているのです。

○吉田教育委員

就学前教育が私立が多くなると、私立は私立ですばらしい教育をされていて、すばらしいと思うのですが、学校によって、その規律とかということと言わない方がいいという方針のところもあるわけですね、私立というのは。そうしますと、就学前教育ということをお考えますと、やはりきちんとしたおぜん立てができて小学校に上がっていただかないと学習に入れないという問題がやはりありますから、そここのところを学校の園の特徴ということでは困ると思います。ですから、私立が多くなった場合、今は私立のほうが少ないですから、小学校に上がってきた場合でも、公立の就学前教育を受けている子どもたちに、少人数なので、習って動いてくれますが、そちらのほうが多くなった場合に、先生方、小学校もっと大変だと思います。ですから、私立が多くなるのであれば、私立のほうにも就学前教育としてこういうことをお願いしますということで、やはりちゃんと連携をとって、小学校、中学校との今、連携もやっていますので、幼小中の連携にちゃんと合意していただいて、協力していただいて、のってくださるのならいいと思いますが、そこがどうなのかなという心配があります。

○登 幸人市長

多分、多分というより、小中一貫教育を入れるときにやはり幼児教育も入っていると思いますね。幼児の部分と小中と、この間、つなぐという言葉があったと思うのですが、そういう形で連携はされていると思います。これは公立だけでなしに、民間園も一緒だと思います。ですから、その高砂市の中で、教育というのは3歳からと、幼児教育もしっかりやっていきましょうということで、小中一貫と幼児とが一貫したような流れの中で、12年間という流れの中で子どもを育てていこう、見ていこうという考え方でおりますので、それが公立やから民間やからという認識というのか、そういうふうには分けてはいないと思います。一緒の5歳児、3歳児として見ていると思いますので、そこは大丈夫なのではないのかなというふうには思っています。

○吉田教育委員

それならいいのですが、今はやはり結構違いがある状況なので。

○登 幸人市長
ああそうですか。

○衣笠教育長

民間は、教育の面で担保できてないような前提で話が進んでいますが、今、市長おっしゃったように、小中一貫をやる中で、この幼小の連携ということもきっちり強化していっていますので、例えば民間の幼稚園であっても、その中学校区で協議会に入って一緒に考えていきましょうね、目指す子ども像をずっと考えてやっていきましょうという動きも出てきて、それも結構広がってきていますので、そこをしっかりと踏まえて、こういった形の民間だから関係ないとか、もう手が離れてしまうとかということではなくて、民間も巻き込んでやるということが、逆にいい意味で、流れ、0歳から15歳までの一貫した教育という面では、うまくそれを活かして使うということも可能かなという気はします。そこがきちっとできてなかったらやはり問題だと思いますが、そこはきちっと整理して、そういった面に関わっていくということは必要なことだとは思いますが。

○登 幸人市長

教育の世界で、民間と公立、それは東京大学が1番かもわかりませんが、後はどうでしょうかね、私学と国公立と。

○山名教育委員

大学の話ですか。

○登 幸人市長

大学です。大学でも、例えば慶應なんかだったら全部ありますね。幼稚園もありますね。

私は、民間の力というのか、そういうのはやはり公立での押しなべての平均値を求めていくのと、あるいは一つ特化して、それでみんなを引っ張っていくのとどっちがいいのでしょうかね。

○山名教育委員

やはり受験で結局、それなりの偏差値の高い大学に入学さす、そういう形の学校と、やはり中高一貫の学校でも、大学に進学したらいいという形のいわゆる私学がある。結局、中高一貫の高校であって、あとはどうしていてもいいですと、いわゆる学校でもアピールするために、野球で甲子園へ出て、名前を売って、一回甲子園を出たら、今までだったら定員を満たすのに大変だった学校が、ある日突然に競争率が3倍、4倍になってしまったという形になっていく。そういう学校もありでしょうね。大学をつくったら、結局、その大学が就職等、いろんな研究、いろんなことをやっていくことに関しての、その積み重ねをやっていくときに、年数はかかるし、そうしたら、一般論ですが、その高校へ入るとすごくいいもですが、その大学があったとしたら、その大学は、みんな学力、偏差値の高い高校、中学校、高校は行っているが、その子らは外へ出る、よその大学へ行く。それで、その大学はあるが、そこへは違う中学校、高校のところから、あるいは普通の一般高校から入ってくる。そうしたら、その大学はありますが、高校までの評価と大学との評価が全然違うことがあったりしますよね。

○登 幸人市長

今、公共施設の分は、案として、今、まだ素案かな。これからまた市民の皆さんに意

見を伺う場をつくって、最終的に今年中か、平成30年中にはまとめたなというふう
に思っていますので、いろんな意見がまた出てくると思います。その中でも、また教育
委員会所管の施設もありますし、また、それ以外の施設についてのご意見も伺えたらな
と思いますので、ひとつまたよろしくお願いします。

それでは、今日の総合教育会議、これで終わりたいと思いますが、よろしいですか。
どうもご苦労さまでございました。ありがとうございました。

○事務局

本日の議題は全て終了しました。

これをもちまして、平成29年度第2回高砂市総合教育会議を閉会いたします。熱心
なご議論いただきまして、大変ありがとうございました。